

平成 26 年度第 8 回 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会

- 日 時 平成 26 年 8 月 26 日 (火) 15:00~17:00
- 会 場 市役所本庁舎 3 階 第一応接室
- 出席者 阿部重樹委員、大滝精一委員、佐藤正実委員、高橋悦子委員、西大立目祥子委員、増田聡委員、間庭洋委員、宮原育子委員、村上タカシ委員、本江正茂委員、渡邊浩文委員
- 議 事 1 開会
2 議事
(1) 委員会での議論から浮かび上がった検討テーマについて
(2) 東部地域における回遊性の実現について
3 その他
4 閉会
- 配布資料 資料 1 第 7 回委員会議論の整理
資料 2 委員会での議論から浮かび上がった検討テーマについて
資料 3 東部地域における回遊性の実現について
資料 4 東部地域での経験 (長期イメージ)
参考資料 委員会報告書レイアウト (案)

○宮原委員長

それでは定刻になりましたので、ただいまから第 8 回仙台市震災復興メモリアル等検討委員会を開催します。

最初に本日の議事録署名委員の指名でございますが、本日は高橋悦子委員にお願いいたします。

議事に入ります前に事務局から定足数と資料の確認及び第 7 回検討委員会の振り返りにつきましてご報告をお願いします。

○事務局 (横野室長)

はじめに定足数でございます。現在 10 名の委員さんに出席いただいております。阿部委員からは、今現在遅れていらっしゃるようですが、出席いただけるということで連絡をいただいております。いずれにしても定足数を満たしていることをご報告させていただきます。

続いて資料の確認でございます。お手元に座席表と次第、資料一覧、本日の資料 1 から 4 までお手元にお揃いでございますでしょうか。それから参考資料といたしまして、現在事務局で作業中の本委員会の報告書の原案というか骨子案をお付けしてございます。また、本日佐藤委員よりいただきました 20 世紀アーカイブ仙台さんとメディアテークの主催で開催されます「3 月 12 日はじまりのごはん」のチラシを置かせていただいております。詳しい内容については、後程佐藤委員からご紹介いただく時間を設けたいと思っております。

資料は以上でございますが、皆さん過不足はございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

続きまして、第7回検討委員会の振り返りについてご説明させていただきます。資料1に基づきまして、ご説明させていただきます。資料1 A 3 縦になってございまして、上段と下段で分れてございます。まずは、資料1の上段についてでございます。前回、議題(1)としまして、メモリアル事業全体の基本理念について、これまでの議論におけるキーワードの中から、重視すべき点は何か、といった観点でご意見をいただきました。その中では、東北の中の仙台というところで、東北を牽引するでありますとか、東北の玄関口としての仙台の役割といったご意見、ご指摘をいただきました。また、仙台市全体を「つなぐ」というところの丘陵部も含めてのご意見をいただいたところです。未来志向というところで、振り返るだけでなく、将来を見つめていくような視点が重要ではないか、あるいは一番下に書いてある形ではない「想い」をつないでいくことも大切といったご意見も頂戴したところでございます。また、上段の右端の欄ですが、「基本理念の作成にあたって」ということで、抽象度を高くしていく必要があるだろうということでもありますとか、様々なものを「つなぐ」ということがキーになるのではないかと、といったご指摘もいただきました。また、人をつなぐといった部分で、継続して取り組んでいくための組織も検討が必要だろうというご指摘もございました。そうした中で、丁度上段の真ん中程、青色で括っているところでございますが、前回、事務局からご提示した案に対しまして、昨年度来、委員会の場で議論してきた4つのテーマ、あるいは取組みだけでなく、5番目のテーマとしまして、スポーツや音楽が果たした役割でありますとか、あるいは3. 1 1の過ごし方といったテーマ設定が必要でないかとのご意見を頂戴したところでございます。

下段に移ります。下段の議事2の振り返りといたしましては、震災アーカイブの利活用拠点につきまして、中心部と沿岸部の機能配置、沿岸部の利活用拠点のあり方について、ご意見を頂戴したところでございます。様々ご意見を頂戴いたしましたが、中心部に関しましては、東北の被災地を廻ることのできない訪問者への対応でありますとか、アーカイブの継続的な収集・編集・発信を考えると、将来的には、中心部にも拠点が必要とのご意見を頂戴したところでございます。また、沿岸部に関しては、ここを発着点としまして、沿岸部の現場を、回遊していく仕掛け、それから、それによって得られる経験全体の設計が必要とのご意見、また、継続的に人が回遊していくための仕掛けとして、人に会いに行くといった視点が大事ではないか等、様々なご意見をいただいたところでございます。

こうした第7回の議論を踏まえまして、前回の委員会におきまして、今回の第8回でこういったものを議論しますというご説明をしていたところであったのですが、一部今回の予定議題を変更させていただいております。前回は、8回の委員会では「全体理念」、それから「個別のテーマ」について事務局から案を提示しましてご意見をいただくというご説明を申し上げておりましたが、前回のご議論、ご指摘を受けまして議論をさらに深めていくために、委員会での議論から浮かび上がったテーマについて、すなわち5番目、6番目のテーマについて、こちらについて今回はご議論いただきたいということと、「東部地域における回遊性の実現」、まさに回遊することによって得られる経験のデザインといったところについて、今回第8回でご議論いただきたいなと思っている次第でございます。

その代りといっは何ですが、もともと年内3回の開催を予定してございましたが、これを4回とさせていただきます、今日2回目でございますから、あと2回開催させていただきますと思っております。11月を予定しております次回の委員会において「全体理念」とか「個別のテーマ」、取組み等を深めていきまして、12月に最終回を予定しておりますが、こちらの委員会で報告書の最終確認を行っていきたいと考えております。事務局からの説明は以上でございます。

○宮原委員長

ありがとうございました。

7月14日の委員会でもかなり皆さんからご意見が出まして、もう少し具体につめていくテーマというのが、今日は2つということで出てきております。一つは委員会での議論から浮かび上がった検討テーマということで、資料の1の上の方の「仙台市が提示した4つのテーマ以外の意見」というのが出てきている部分と、それから東部地域をもう少しピンポイントの遺構の話だけではなくて、地域としてきちっと考える必要があるのではないかとご意見もありましたので、改めて今日はこの2つについてお話をし、その後全体の理念の話に1回増やしていきたいということになりました。

それでは、早速なのですが、議事の方に入らせていただきまして、議事の1番目として「委員会での議論から浮かび上がった検討テーマ」についてということで、事務局から今日の資料でご説明をお願いいたします。

○事務局（横野室長）

それでは、資料2に基づきまして、ご説明いたします。前回、第7回の議論で浮かび上がった検討テーマといたしまして、スポーツや音楽などが果たした役割、それから3.11の過ごし方を議論することによって、想いを後世にどう伝えていくかといったことがございました。

これを踏まえまして、「文化・芸術による、心の復興と想いの継承」といった仮のタイトルをつけてございますが、これに関しまして、震災発生後の様々な取組みでありますとか、委員会でのこれまでのご意見をこの資料に取りまとめたでございます。

これまでの委員会での紹介事例、視点といたしましては、文化、芸術、スポーツなどによる復興に向けた活動といたしましては、第1回委員会の資料からの再掲となりますが、村上委員さんが携わるMMIX Labさん、それから西大立目委員さんが携わるRe:プロジェクトさんの活動のほか、音楽の力による復興センター・東北さん、それから仙台フィルハーモニー管弦楽団さんによる音楽に関する活動プロジェクトがございました。また、ベガルタ仙台、楽天イーグルス等々のスポーツ関係のプロジェクトもございます。

これらの視点につきましては、こうした文化・スポーツなどによる活動が、復興に立ち向かう人々の想いを表象し、ある種シンボライズしているのではないかと、といった視点になろうかと思っております。

また、3.11の過ごし方に関しましては、こちらにも主に第4回委員会資料の再掲となっております。3.11に開催されるものとして、まずは最もフォーマルなものとして、仙台市の追悼式がございますほか、青年会議所さん主催のキャンドルナイト、星空プロジェクト等々、こういった取組みがございます。また、新た

なものといたしまして、宮城県において、亡くなられた方への追悼、それから震災を風化させない、語り継いでいくことを目的として、3. 11を「みやぎ鎮魂の日」と制定しているところでございます。

阪神・淡路や、中越における取組については、表に記載のとおりでございまして、様々な取組が行われているところでございます。

こちらに関して、これまでの委員会でのご意見ということで、中段にまとめてございますが、震災後の様々厳しい状況の中で、音楽や文化、スポーツが大きな励みとなり、推進力ともなったとのご指摘でありますとか、祭りといったイベントでのメモリアルもあるのではないかとのご指摘。それから、音楽、文化、芸術の力を活かしたメモリアルホールの実現が必要だ、といったご意見も頂戴しているところでございます。

3. 11の過ごし方に関しましては、これを休日として、震災を考える日とするといったご意見も頂戴しております。また、元々の4つのテーマに収まらないご意見としましては、前回村上委員さんから、学校ごとの地域性、独自性に応じた防災教育といった取組も大事ではないかといったようなご意見も頂戴したところでございます。

こうした中、本日ご議論いただきたい点といたしましては、「文化・芸術による、心の復興と想いの継承」について、メモリアル事業としての位置づけはどのようなものになるのか、といった点が一つになるのかなと思ってございます。

また、合わせてどのような取組を行っていくべきか、例えば音楽の力を活かして想いを継承していくためにはどのような取組が必要か、また3. 11の過ごし方に関しましても、休日として継承していくのか、あるいは防災教育とも絡んでいきますが、逆に小中学校において、震災を学ぶ日としていくのか、など、様々なご意見があると思います。こちらについて様々なご意見を頂戴できればなと考えているところでございます。事務局からの説明は以上でございます。

○宮原委員長

ありがとうございました。今の事務局からのご説明の部分ですが、議題(1)の新たなといいますか、委員の皆さんの方からご提案がありました検討テーマについて、少し再度お話をしていきたいと思えます。

まずご説明の方で何かご質問ございますか。よろしいでしょうか。

今日議論していただきたいことということで、「文化・芸術による、心の復興と想いの継承」という、つないでいく仕組みの部分だと思うのですが、これをどういう風にメモリアル等の検討委員会の提案の中に位置づけていくかということで、ご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。まず、そうしましたら文化・芸術の部分ですけれども、音楽の方で前回は間庭委員さんの方から色々とお話をいただいて、その必要性に関してお話をいただいたのですが、改めていかがでしょうか。

○間庭委員

資料1, 2の中であらかじめいただいた資料でそういう議論があつて、ある程度整理された形で挙げていただいてありがとうございます。今委員長からご指摘の通り、震災前からもそういう事実はあるんですが、震災後特に心が非常に痛んでいる中で、最初はなかなか命そのものを何とか保全したいという所が強かったですが、ちょっと落ち着くと書いてあるようなことが励みになって、人と人とのつながりですとか、いろんなことを

多様に助けていただいた想いが非常にありましたので、これを是非今回のメモリアルプロジェクトの中に据えていただきたいと。具体的な提案として繰り返しになりますが、メモリアルホールを是非構築していただいて、そのことを継承発展していただきたいということを申し上げました。

○宮原委員長

ありがとうございました。それから大滝委員さんも音楽の力による復興センター・東北の代表さんとして、この音楽を復興のメモリアルに組み込んでいくということについても、以前の委員会でもご意見をいただいたと思いますが、今回改めてもう一つ検討テーマの中に入ってきましたので、ご意見をいただければと思います。

○大滝委員

私は、前回出席できなかったものですから、第5のテーマとして心の復興と想いの継承というのを新たにテーマとして加えていただきました事を本当にありがたく思います。

1回目の時にも音楽の力による復興センター・東北の事についてお話を申し上げたので、そのことは、繰り返して申し上げるまでもないかもしれませんが、仙台フィルハーモニーの演奏会だけでも、被災地で400回近い演奏会をしているということもありますし、それが特に震災の後、勿論仙台フィルハーモニーがフルオーケストラで演奏するというところもあるのですが、もっと規模の小さな室内楽ですとか、コミュニティセンターとか学校での演奏会とか、全体として被災地をはじめとする地域の住民の方、市民の皆さんたちと音楽との距離がすごく近くなってきていると思います。震災を契機にして音楽とかアートは有ればいいけれども、特に無くてもいいのではないかと多くの皆さんが思っていたのはずいぶん違って、勇気を持って生きていくうえでの不可欠な要素というか、そういう想いを強く、私自身も持っていますし、多くの方々がそういうことを実感しているのではないかと思います。音楽を演奏する人と聴く人との間の一体化とか、実際に私なんかもそうですが、大きな声を出して歌ってみると自分が勇気づけられるとか、元気が出てくるとか、そういうことが、素朴なことかもしれませんが、復興に向かって元気を出していくという意味でも大変大きな意味を持っていたのではないかと我々は思っています。

もともと音楽の力による復興センター・東北というのは、仙フィルが被災地で演奏会をするための資金を集めてきて、背中を押して応援していくということを大きな目標に掲げてずっとやってきました。こういう震災から3年5ヶ月あまり経過して、センターというのはもともと形も何もなかったものであって、応援していくという事だったわけですし、もともと音楽というのは心の復興という、これも形のない物を応援していくということだったのですが、ここまでやってきて、それを「メモリアルホールという形で実際に見えるものにしていきたいな」という想いがあって、最近はバーチャルなものから目に見える形のあるものに変えていこうという活動も一緒にやっています。

仙フィルだけではなくて、例えば地元の音楽家の皆さんたちと一緒に、例えば震災で統廃合することになった小学校、中学校の校歌をきちんと残していくとか、震災でダメージを受けた地域の郷土芸能ですとか、そういうようなものをもう一度復興させるための色んな支援をしていくことも、私どものセンターの中で取り組んでいて、そういうような取り組みと合わせてこれを進めていくことになると思っています。

それで、これも前にも話したかもしれませんが、音楽の事だけで言うと、演劇も含まれると思いますが、阪神淡路大震災の後に、兵庫県立芸術文化センターというのが震災10年後に立ち上がって、現在も活動しているわけですが、それは私たちにとっても大きな参考になっていて、これまでも2回ほどシンポジウムをやり、これを前に進めていくということをやってきました。私達が、兵庫県立芸術文化センターを見ていて感じるものが2、3あってですね、一つは仙台以上に音楽というのが市民一人ひとりのものになってきている。稼働率が90%を超えていて、いつどこへ行ってもそのホールの中で演奏会が行われている状況に近くなってきているんですね。本当の意味での音楽というものをベースにして、市民との結びつきが非常に強くなってきているという事と、たまたま10年後にセンターは出来上がったわけですが、本当に復興の勇気を与えている、そういうことも大きな原動力になっていると思っています。

それから、これは仙台の中ではあまり起こっていないことかもしれませんが、センターが出来ることによって、まちの形が変わってきているということがあると思います。そのまち自体を変えていくというか、それから世界から一流のアーティストが来るということによって、これも東北全体に対して大きなインパクトを与えていくというか、そういう可能性が見えるような気がしています。これは、これまでずっと仙台市が進めてきた楽都仙台、「がく」というのは音楽の都の方ですが、そっちの構想とも非常にマッチしているものだと思いますし、それを更にメモリアルホールなり、センターという形で実現していくということによって、その延長線上の中で色々なことが出来るのではないかと考えています。もちろん、具体的にどういうイメージでメモリアルを考えていくのかというのは、これから議論が必要だと思っていますが、既に私達が始めていることが幾つかあります。一つは、具体的にセンターに形を与えるという意味で、多くの市民の皆さん方から少額でもいいので寄付を募るということをしています。そういうふうにして復興センターに形を与えることを市民運動から始めていこうということをしています。一方で、経済界の皆さんたちとも協力して、仙台経済同友会の大山代表幹事の提唱にもありますが、この3年間で10億円の寄付を集めて、実際にセンターに形を与えていこうという。その推進力を付けていこうということをしています。私達としては、民間や市民の側からこういう活動を進めていくことは、とても大切だと思っています。まして今は復興の色々な事業がありますから、そういうものを民の側からも支えていくということが、非常に重要なことと思っています。

もう一つは先ほど、非常に規模の小さな色々な活動というのが、それぞれのコミュニティとか地域の中で起こっているというお話をしたのですが、こういうことをもっと沢山やっていく必要があると思っています。これは、仙台フィルハーモニーをはじめとして、色々な地元の音楽関係者の皆さんたちとも協力して、音楽と市民との間の多様なつながりとか、関係性というのを色々な所で提案していくとか、試みていくとか、実験していくというか、そういうことを具体的な何かものとしてのセンターなりメモリアルというものを実現する前に、それと並行しながら進めていくことが重要だなと思っています。そういう活動を進めていくということも非常に大切なことと考えています。

もちろん、音楽だけに限っていても、この種のメモリアルというのは基本的には過去を振り返るというよりも、むしろこの後復興に対して勇気を与えていくという、どち

らかというと未来に向かって復興に邁進していくための力を与えていく要素が強いとは思いますが、しかし、メモリアルということには代わりはないので、メモリアルの中に鎮魂ですとか、犠牲になられた方々に対する祈りだとか、そういう要素をシンボルとして入れるということは、私はとても大切だと思っています。

どんなものをつくるのかということについては、この委員会で具体的な事という事ではないと思っていますが、私は2つだけ大事な事だと思っていますことがあります。いわゆる音楽ホールと言われているものについても、既存の拠点とか施設というのが仙台市内にかなりたくさんあるので、類似の施設とかハードの拠点ときちんと住み分けをするとか、差別化するということはとても大切だと思っています。もう一つは仙台市民だけではなくて、東北全体の復興のシンボルであるメモリアルであるので、アクセスが良さというのは決定的に重要だと思っています。その意味では、どこかに立地するとすればできるだけ都心部の中、まちの中心部の中に立地するというのが好ましいのではないかなというのが、私が考えているイメージです。大体そんなところです。

○宮原委員長

ありがとうございました。まず、音楽の事につきまして大滝先生の方からかなり具体的に、今現在活動が始まっている部分、それからこれからの部分の構想といいますか、メモリアルに対するご意見をいただきました。今のご意見からスタートされても結構ですし、皆さんから色々といいただければと思います。いかがでしょうか。西大立目委員さんお願いします。

○西大立目委員

いつもお休みばかりしていて、前日も休んでしまったので分らない所がずいぶんある中での意見になってしまうのですが、この「文化・芸術による、心の復興と想いの継承」というのを、一つのテーマとして立てるとすることのための検討をするということでしょうか。

この事例の3つめに「Re:プロジェクト」というのがあって、それを文化事業団がやっているものを私もお手伝いをしているのですが、文化・芸術という箱をあまり大きくしすぎると、そこに何でもかんでも入れてしまって、もっとリアルな実際に破壊されたり、生活を壊されたり、移転させられたりというような生々しい部分というのがどこにいつてしまうのかなというのが、ちょっと心配な気がします。もちろん私も音楽の力による復興センターに関わったりもしているので、芸術文化というのが、災害の後の人々の力になると十分に分かっているのですが、例えばテーマのところの、今日いただいた資料の1枚目のA3の「将来を見つめる視点」というのも大事ですが、もちろんそうではあるのですが、実際のところどういうことがここで起こったのかというのが、抜け落ちたりはしないかなという心配をしてしまいました。リアルに何が起き、何が2年、3年、4年、10年、20年という経過の中で起きていって、変わって行って、忘れられつつあり、記憶されつつあり、ということが起きていくのかということ踏まえた上での何かテーマが、やはり要るような気がして。

もちろん、芸術・文化は大事だと思うのですが、なんでもかんでもここに、「防災文化」というのが下に入っていて、防災までもここに入ってしまったら、もちろん文化だとは思いますが、文化としての扱い方に気を付けておいた方がいいのかなと思いました。

○宮原委員長

ありがとうございました。事務局からは何かご意見ございますか。

○事務局（横野室長）

こちらに関しては、第5のテーマということでございまして、元々はこれまで4つのテーマとして議論を進めておりました。前回の議論のキーワード出しの中で、これまでの委員会の中でのご意見をとりまとめたところ、4つに分類されないものとして代表的なものとして音楽、文化等々がありました。こちらについても今、西大立目委員からありましたように、将来に向けていくという話と、あったことをしっかりと忘れずに伝えていくという、どちらもすごく大事だと思っています。

加重のかけ方のバランスが非常に大事なのかなと思っておりまして、どちらか一方ではおそらくバランスを欠いているということになると思いますので、それは仙台市としても考えていきたいなと思っているところでございます。そういう意味でも両方バランスを取りながら、将来に向けて復興に向けた原動力となるような、人々を勇気づけるようなメモリアルというのもあっていいと思いますし、当然、原点である被災を忘れていけない、それをしっかり伝えていく、あるいは失われてしまった生活をしっかり伝えていく、両方あっていいと、そのあたりのバランスをしっかりと考えていきたいなと、事務局としてはそのように考えています。

○宮原委員長

ありがとうございます。

前回もいろいろな議論があって、仙台市さんの方から示された4つのプロジェクトは、例えば貞山運河のこととか、皆さんで緑を植えていくというような、そういった具体の事業に関わったところでこれまで意見出しをしたのですが、やはりそれだけではないでしょうと。

もう一つは事実をしっかりと伝えていく仕組みの中で、これを何年伝えられるのだろうかという、そういった継続性の部分や、それから、当事者がどんどん長くなればいらっしやなくなる中で、きちっと伝わるような仕組みづくりが必要だろうということで、一つはこういった音楽とかで表現されていくものも、一方で生まれてきている訳なので、そこを上手に使っていく必要があるのではないかというご意見もきちんといただいています。

音楽だけではなくて、今、西大立目さん達が関わっていらっしやる「Re：プロジェクト」や、それから村上委員さんのMMIX Labの活動、これも去年11月に皆さんでいろいろとお話を伺ったりしているわけですが、その項目が、今回検討委員会の方から「仙台市さんのから提示された4つ部分だけで終わってしまっは」ということで、そこに、はめ切れないものが出てきました。今は仮タイトルとしてありますので、皆さんで改めてこれでは適当ではないでしょうと、この今の言いたいことが含まれていないのではないかとということで、新しい名称を含めて何かご提案いただければいいのかなと思います。いくつかありますので、例えば3. 11のあり方・過ごし方ということもここに入っていますので、基本は忘れない様にしていくためのきちとした仕組み、そこらへんが議論だったかなという気がします。いかがでしょうか。本江委員さんお願いします。

○本江委員

今の文脈とちょっとずれてしまうかもしれませんが、西大立目さんの言われることも全くその通りだと思いますが。今まで4つ、緑、運河、アーカイブ、遺構という様に、割とアクチュアルなものが4つ出ている中で、それから抜けているものとして何をすくわないといけないかという議論という理解です。そのバランスの問題は5つ並べて改めて考える必要があります。

この5つ目の話でいくつか考えました。一つは、未来に向けてのところを実体化するための一つのアイデアですが、受け売りで僕自身は見えていないのですが、ヨーロッパの戦争博物館で戦争についての展示があるのですが、その展示の一番最後にガラーンと広い展示スペースが空いているのだそうです。そして、事も無げに「これから起こる戦争のための余地である」という説明がなされているということなんですね。

いくつか災害に関わるメモリアル施設を見て参りましたが、当然ですが自分たちの所がピークで、最後に位置づけられているんです。当然そうなのですが。例えば、関東大震災とか、今見るとそちらこちらに、色んなことがあったということが抜け落ちてしまって、厳しい言い方ですがすぐに陳腐化するし、現代的なインパクトは衰えてくる。将来に対してということであれば、大変辛いことではあります。これからの災害復興で東日本大震災が最悪ということに限らない、もっと酷いこともあるかもしれないので、その時に向けて我々この先も起こりうる災害について引き続き引き受けていって、それについての知見も集めていくような気概を示すことが必要です。具体的はどうすればというのはありませんが、展示のコンセプトを考える時に「東日本大震災をピークにしない」、「この先もある」ということを盛り込むということが必要ではないかと思いました。

その時にもう少しポジティブに今の事を言うと、東北大学では災害科学国際研究所が震災後新設されて、そうすると今回の広島の大規模災害もそうですが、新しい災害についての情報がどんどん来るんですね。次第に、分かることが増えていきます。これから先に災害に関わる科学的な知見もどんどん溜まっていきますし、アップデートされますので、そうしたものの動向についてみる事が出来て、あの時はこうだったけど今はここまで来ているということも分かると、仙台がある歴史的な責任を引き受けて展示や情報を共有する場を持つということが出来るのではないかと思います。展示の中身はアップデートし続けていって、最新のものを示し続けるというのが大切です。

その中にもう一つ、今まで「フィクション」といわれてきましたが、そういう被害に対する人々の想像力、その表現、そうしたものも生々しくリアルなもの、それはそれできちんと収集をしていく。時間が経ったことではじめて出てくるものもあると思いますので、そうしたものを集めて、新しい物が出てくればそれを拾っていく、ということ息長くやっていくことが必要ではないかと思えます。

○宮原委員長

ありがとうございました。他にいかがでしょうか。村上委員さんお願いします。

○村上委員

音楽であったり、美術であったり、パフォーマンスであったり、芸術文化による色んなご支援というのは今回の3.11以降も非常に有効だったというのは皆さんご存知だと思います。また、アートだけではなくてスポーツなんかも非常にみんなを元気づけた

りとか、楽しませてくれたりとか、そういったこともあったと思います。やはりこういう復興関係で鎮魂ももちろん大事なんですけど、新しく復旧復興から再生であったり、創生であったり、次の段階にステップアップするようなアプローチとして、芸術文化というのは非常に役立つのではないかと思っています。

色んな世界で行われている、日本でされているのは、横浜トリエンナーレが始まっていますし、越後妻有アートトリエンナーレも定着してきていますし、神戸ビエンナーレというのもありますけど、どれもまちを豊かにする試みとしては成功しているのではないかと思うのですね。仙台市の姉妹都市の韓国の光州でもアートのビエンナーレを隔年でやっています。あれなんかもすごい人が来るんですね。学校単位で生徒を丸ごとバスで引き連れて行って見せてしまう。小さい時から幼少体験は非常に大きいですから、これを10年、20年続いていくと文化度がどんどん上がっていくのですね。

そういう事を政令指定都市である仙台、宮城では全然行われていないというのが、まず構造的な問題であって、震災が起きて、尚且つ、アートで何かやりたいというのであれば、今までの事を踏襲するのではなくて、一步踏み込んだ新しい試みとして国際展をやるというのが有効なのではないかと思っています。それは、3年に1度のトリエンナーレの形式にするのか、隔年のビエンナーレにするのか、そういう名称を組み込めば3年に必ず1回やらなければいけないようなものが出てくると思うのですね。仙台アートトリエンナーレとか。今、ちょうどオリンピックというのも東京で決まりました。大体世界的に見ても、オリンピックの前年とかそういう風に大きなアートプロジェクトをやったりするんですね。そういうことを考えると、その前年度(2019年)、また、その3年前という形で計画を立てていって進めていくと、見えてくるものがあるのではないかと。

それは、アート関係者だけではなくて、もちろん間庭さんもいらっしゃいますが商工会議所を含めた経済界の方であったりとか、仙台市だけではなくて、県とか国とか、色んな所がお金を出し合いながら、また民間と協働でやるという仕組みで進めていくと。そういうのが、具体的な形では良いのではないかなと思います。

現に、仙台市は政令指定都市ですが、美術館が無いわけですよ。本来美術館があれば何億円というランニングコストがかかるわけですが、そういう予算は、本来は文化の基本として計上すべきなんですけど、計上されていないのであれば、あえて箱ものではなくてそういうソフト予算にまわすようなものとか。前日も言ったように、公共事業をやる際の建築費の一部をパーセントフォーアーツ条例のようなものを組み込んで基金化して行って予算を作るというのは、具体的に可能なのではないかと思っています。

○宮原委員長

ありがとうございました。こういった大きなアートイベントということも、考えていく必要もあるかなということでご意見をいただきました。

他にいかがでしょうか。渡邊委員さんお願いします。

○渡邊委員

芸術・スポーツ・文化というものが、確かにあの時に励まされたなということを思い起こしながら考えてみたのですが、まだ未整理なんですけど、すごくこういう事というのは良きにつけ、悪きにつけ、悪きにつけというのは先ほど本江先生のご紹介なんですけど、人間の可能性を何らか示してくれるというところに意味がある。「こういうことができる

のか」「こういう事を考えている人がいるのか」ということに気付くという所が、励みに繋がったのかなと思ったのですね。

僕はスポーツが好きで、あの頃ベガルタがかなり上位に食い込んだとか、レディースがこれも経緯はなかなか辛いものがあるのですが、での出来上がって頑張っているとか、楽天イーグルスも田中選手が頑張っすぎてすごかったとか、いろいろなことを思い起こすわけですね。これからもそういうことを思い起こすと思うのです。スポーツですので、非常に調子が悪い年なんていうのもあると思うのですが、逆に調子が良かった頃を思い出して、あの時はということで震災ともつながってくる。こういうことって人間のそういう可能性の発露であり、かつ時間をつないでくれるというような催事でもあるのかなと思っています。

さらに言えば、例えば高校時代にサッカーをやっていたのですが、何か不幸があったのだけれども、サッカーの試合をするという時に喪章をつけたりするのですが、何か震災復興ということアイコンとして抽象的に表して、それがこれからもずっと何かある度に使われ続けていく、そういう交流催事ごと、そういう見方をしてもいいのかなとちょっと思っていました。

○宮原委員長

ありがとうございました。いかがでしょうか。阿部委員さんいかがでしょうか。

○阿部委員

私は芸術とか文化は苦手なので、無教養をさらけ出してしまふ。宮原委員長の方から広く考えていいという事なので、②の3. 11の過ごし方ということにこだわってきていたのですが、そのことに関して既に本江委員がご発言された特に一番目の論点が大切だろうと思っています。忘れないためにということで、一つには仙台市に生活をする私達の内なる仙台市民のために、3. 11を忘れないということもあると思いますが、少なくとも日本全体に対して3. 11で経験したこと、やはり忘れないでということ、伝え続けていくという意味での3. 11の日というのが必要だろう。

何故、本江委員の第一の論点で申し上げたかと言いますと、不確かなのですが、今回の広島での土砂災害。昨日だったか、一昨日ネットでブログを見ていましたら、避難所に避難された方の書き込みなんですけど、どうも「東日本大震災での避難所の経験を私達は活かせていなかった」と。非常に不確かで、その方の書き込まれたことしか読んでいませんが。避難所の中がすごく混乱されているみたいです。

そういうことって、私達の経験がやはり活かされてないのだなということにもなり兼ねない。それは私たちがさえ風化ということを恐れている訳ですから、日本の社会全体でみれば、済んでしまったことということで、私たちにとっての神戸のように、これからの日本の社会にとって東日本大震災が神戸や中越のような位置づけになっていくことを、私達は、もっとあの時自分たちで大変な思いをしたという、それから犠牲になられた方々がいたという。あるいは文化や経済で大きな損害を出したという事、そういうことに対して責任を背負って生きていくという意味で、本江委員が今言われたように、未来の自然災害に対して、私達の3. 11における経験、仙台市での3. 11での経験を忘れないで欲しいという、そういう視点と内容がもちろん必要なのではないかなと思っています。具体的にどうするかということは、今思いつかないのですが、3. 11の過

ごし方という意味では、もう少し具体的に言えば、2011年の3.11以降に起こった事、本江委員が仰ったことを別の言い方で言えば、その後で得られた知見とか体験とかを3.11の時点と比較しながら、これほど積み上げられて改善されてきたとか、そういう視点を含んで3.11を振り返っていくということも必要ではないかなとも思います。

○宮原委員長

ありがとうございました。この先も起こりうる災害への心構えとか、先ほど本江委員さんが仰いました歴史的な責任を引き受けるとか、そういったところを改めて阿部委員さんからもお話をいただきました。3.11の時期と今、まだ3年少ししか経ってはいないのですが、今佐藤委員さんの方で定点観測という形で現場を見つめていらっしゃると思うのですね。短い時期ではあるのだけでも、これを長い時間につないでいく時の難しさも感じていらっしゃると思うのですが、今この議論の中で、もしお話しできることがありましたらお願いします。

○佐藤委員

震災発災から3年半ぐらい経ったので、その3年半の中で変化したことを写真であったり、言葉であったりで示していくというのは、まだまだ短いタイムではあるかなとは思いますが、ただ一つこういった取り組み方があるんだというものを、事例を先に示しておくということが、これからの活動とか、ものの見方、こういう見方もあるんだとか、こういう手法があるんだな、ということの一つの例として提供するやり方はあるのかなと思います。

先ほど話があったフィクション、ノンフィクション、アートの話でいくと、アーカイブは記録なのでそこがノンフィクションの話になるのですが、ノンフィクションを全面的に押し付けられると拒否反応というのがどうしても出てくると思うのですね。そういった意味ではそこから小説であったり、絵本であったり、映画であったり、その作者の想いというものをそこに乗せることで別の表現方法が出てくると思います。それはノンフィクションを活用したフィクションということになるのかなとは思いますが。例えば東野圭吾さんが書いた「幻夜」というのは、阪神淡路大震災をテーマにしていますが、阪神淡路大震災の映像は、まだ見たくはない人たちが、フィクションであれば読んでみたいとか、「なるほど、こういう面もあったんだな」というのが分かる。そういった意味でそれぞれが、それぞれを活かす。ノンフィクションとフィクション、アーカイブとアートと、そんなことが一つ挙げられるのではないかなと思いました。

○宮原委員長

ありがとうございます。いかがでしょうか。いろいろとご意見をいただいておりますが、西大立目さん改めて、何べんもすみません。

○西大立目委員

よく理解しないで発言してしまって、ちょっと反省しつつ、よく分りました。やはり、本当に芸術・文化の力というのは分りますし。この文化の表現の仕方が、もう少し工夫されてもいいのかなと思います。心の復興なんて簡単に言わないで欲しいな、という気もちょっとなったりして、もう少し考えてみたいなと思います。

○宮原委員長

ありがとうございます。

今、議論していただいた5つ目の部分は、もう一つの委員からのテーマとして一つのまとまりをつくってみましょうという試みなのですが、これはこれでまとまりを持っておくという事はよろしいですか。委員会として、色んな切り口はあるとは思いますが。今のお話をいただいた皆さんからのご意見をまた事務局の方でまとめて、整理していただきながら5番目の枠について明らかにしていきたいと思います。

あと付け加えて委員さんの方からお話しされることはございますが、よろしいですか。ありがとうございます。

それでは、続きまして議事の2番目なのですが、東部地域における回遊性の実現ということで、これも前回の委員会でいろいろとご意見が出た部分で、資料1の議事の2番目の「中心部と沿岸部」という対比でまとめてありますが、特に東部地域についてどのように考えていくのかというので、ちょっと改めて事務局が整理をして下さいましたので、ご説明をよろしくをお願いします。

○事務局（鈴木主査）

それでは、お手元の資料3に基づきまして、東部地域における回遊性の実現についてご説明いたします。こちらにつきましても、画面の方でも出しますので見やすいところでご覧いただければと思います。

まずは、資料を1枚めくっていただきまして、3ページになりますが、前回、第7回委員会にてお示ししました内容の振り返りになります。その時に、中心部・沿岸部の2地区での機能配置・拠点による継続的発信としまして、こちらのイメージ図をお示したものでございます。

中心部の役割を、東北、宮城の玄関口であって、「3. 1 1を収集・編集・発信する機能」とします。沿岸部の役割を、仙台東部地域や近接する被災地域、例えば藤塚地区まで行きますと川の向こうは名取市関上地区でございますし、北の方は多賀城市、七ヶ浜に非常に近いものでございますので、そういったところで被災地域への玄関口でもあり、「3. 1 1を知り学ぶ拠点」と東部地域、沿岸部を位置付けまして、荒井地区にフィールドワークの拠点ともなる、アーカイブ利活用拠点を設けるとしたものでございます。

これにつきまして、前回委員の皆様からは、機能配置全体につきましては、宅地被害の状況を伝える場というのにも必要なのではないかと、それから中心部につきましては、中長期的にはセンターとなる拠点が中心部にも必要である。それから、沿岸部については、フィールドワークがこちらの方が主役というか、重要であり、東部地域における経験の設計が必要であるといったご意見をいただいております。

これを受けまして、事務局で多少の修正を行ったものが、次の5ページにあります図になります。まずは、修正した場所としまして、図の左側、丘陵部の宅地被害ということで、茶色で示しております丘陵部ですね。その被害や復旧の様子などの情報を、中心部でアーカイブするというので、茶色い点線で丘陵部の情報を中心部の方に向けてございます。

また、中長期のイメージ図ということになりますので、前回は「アーカイブ機能」として赤い点線で丸で囲っておりますエリアとしてございましたが、今回はそこを「アーカイブ拠点」という記載にしてございます。

さらに、中心部に集積された情報を、荒井地区の利活用拠点において利活用する。フ

フィールドワークの後に、そこで得られた経験、感想といった情報を中心部へフィードバックする、ということで中心部の方から荒井の利活用拠点に双方向に矢印を入れてございます。

こういった機能配置を踏まえまして、次に、本日の議事になります沿岸部拠点・東部地域の回遊性についてでございます。

前回いただきました「経験の設計」というご意見につきまして、お手元の別紙資料4、A3の1枚ものがございますが、こちらに事務局として、東部地域における「経験」の長期イメージにつきまして、荒井地区を拠点とした場合について整理したものをお示ししております。

この考え方としましては、まだ被災地であって、復興の跡を保存してありますと、なので見に来てくださいというだけでは、震災に対する関心が徐々に薄れていくにつれて訪れようとする方が減っていくのではないかと。そこで伝えたいこと、経験してほしいことを設定し、それに基づいてルート設定、情報提供、それから現地をまわって戻ってきからのフィードバックといったことが必要であろう。また、そのうえで、人や地域といった魅力が付加されることで、繰り返し訪問したくなるエリアになるのではないかと考えたものでございます。この資料左から、まず現地へ出発する前の荒井地区拠点、それから真ん中、緑色にございます東部地域、現地、右側が現地から帰ってきた後の荒井地区拠点となっています。

また、縦方向は、上段がそれぞれの場所にあるコンテンツ、下段がそれぞれの場所での経験となっております。また一番下の段、水色で囲ってございますけれども、こちらには訪れた方が自分の地域に戻った後に、東部地域での経験をつなげて行って欲しいと望むこと、という構成になってございます。

まず、左側のオレンジで囲った部分、出発前の荒井地区拠点でございます。ここは、出発前でもございますし、震災の概要、被災状況、東部地域の全体像といった、フィールドワークへ出るにあたって必要な情報が、主なコンテンツとなります。そういった情報ですとか、震災や地域に対する人々の想いを知り、また、危機管理について説明を受けることで津波被災地域であるということを感じていただくことなどが、ここでの主な経験となります。

次に、真ん中の緑色、現地でございますが、東部地域の将来をあらゆるイメージパースをベースとして、イメージ図を作成してみました。文字が小さくて、情報量が非常に多くなっております。これについては、ご容赦いただければと存じます。

また、図中に、前回の委員会でご意見がございました、図の真ん中左側の方に、「地下鉄東西線で仙台駅から14分」といったことを書いてございますが、これは中心部からの距離感を分かっていたくために示しました。そこから更に荒浜の海岸部近くまで、約6km（自転車で約20分）というところも記載してございます。

この、東部地域におけるコンテンツとして両側に記載してございますが、あくまでも主なものと考えてございまして、この他にも、様々な視点、切り口があるものと考えております。

現地でこれらのコンテンツを通しまして、経験して欲しいこととしましては、亡くなられた方々への追悼、津波被災の甚大さを感じ、復旧復興の過程を見るといったことに

加えまして、前回ご意見いただきました日常とは違う異質なランドスケープに触れること、百万都市である仙台市の中心市街地から約30分程度以内の距離に、田園地帯が広がっていて、さらにかさ上げ道路があって、その先には人が住まない地域が広がっている。そういったことも感じていただく。あるいは、現地で人に会い、想いを寄せる、また、人・地域とつながる、現地で五感を使って東部地域を感じていただく、といったことであらうと考えております。

そして右側ですね、荒井地区拠点、オレンジ色で囲ってございます。事務局としてはここが重要なんだろうと考えておりますが、戻ってきた後になります、写真、映像といったコンテンツは同じものではあるのですが、現地における経験を得た後で、これらのコンテンツに対して感じるものが変化することもあるのではないかと考えております。そういった変化を感じてもらい、そういったフォローアップですとか、あるいは地域を回っての感想、経験といったことを、できる限り収集・アーカイブしていくフィードバックの仕組みが、荒井地区の拠点に到着後の機能として必要ではあると考えておりますが、こちらに点だけ記載がございまして、現時点でそれをどのように引き出すかといったところについて、アイデアを持ち合わせておりませんので、このあたりをご意見いただけると幸いです。

この、現地から戻ってきて、出発前と違う気づきを得たり、得た感想や経験を振り返り記録する、といったことが、荒井地区拠点の到着後における経験であると考えております。

また、下の青い部分、水色で囲った部分でございますが、東部地域における経験の、アーカイブへのフィードバックは、アーカイブに対しては荒井地区拠点の機能としてございまして、東部地域で経験をした方々が、自分の住む地域、家族や周囲の人などへのフィードバックといいますか、つなげてほしいと望むこととしまして、「伝える」ですとか「防災の取り組みに生かしていただく」、あるいは自身が東部地域の人や地域とつながり続けて、それで再度現地を訪れていただく、といったことを望んでございましてそのことを記載してございます。

以上、東部地域において得られる経験ですとか、経験していただきたいことと、そのために荒井地区拠点に必要な機能をご説明いたしました。ただ、ここまでご説明しました、コンテンツというのは、このままでは、各要素・パーツ単位で分散してそこにあるというだけでございまして、「人や地域とつながる」ですとか、再度現地を訪れてもらうためには、これらの要素、経験をコーディネートする必要があると考えてございます。ここで資料3の方に戻っていただきまして、7ページ目。下に四角で囲ってございますが、これまでの委員会でも、この点につきまして観光の視点を含めて、有機的に人を誘導するとか、3.11オモイデツアーのような形で開催できないか、「人に会いに行く」「その地を好きになる」といった視点も重要であるといったご意見もいただいております。そこで、必ずしもこの形態と限定するわけではございませんが、こういった経験のコーディネートに関連するということで他地域での参考事例をいくつかご紹介いたします。

まず、事例1つ目としましては、阪神・淡路大震災についてでございます。様々な取組はあると思われまますが、基本的には規模の大きな拠点施設であります「人と防災未来

センター」を中心とした取組となっているようでございます。資料にもありますように、語り部の体験談や、震災を語り継ぐコーナーも、人と防災未来センターの中にあるということになっておりまして、これは中心市街地が甚大な被害を受けたという特性がありますので、そうすると基本的には復旧してしまうという部分がありますので、その辺り仙台とは異なる部分があるのかなと考えてございます。

事例2つ目としましては、新潟県中越大地震になります。中越地域では、大きな被害のあった各自治体ごとのメモリアル拠点、4施設、3公園がございまして、これらを結んで中越メモリアル回廊としています。資料の10ページ目になりますが、こちらの場合もイメージとしては、仙台市の東部地域の取り組みというよりは、例えば宮城県内の沿岸被災市町村の連携した取り組みといったようなイメージになるかと存じます。メモリアル回廊の主要施設におきましては、それぞれ、資料にありますような、語り部による講話や体験プログラムなどがそれぞれの施設で用意されています。中越メモリアル回廊を見学する日程は、1日コースですとか半日コースですとか日程に応じまして、5つのモデルルートが資料12ページにありますように設定されていますが、回廊全体をトータルでコーディネートして、ガイドするといった取り組みまではないと聞いてございます。

続きまして、事例3ですが、戦災の記憶の伝承の一つの事例としまして、「長崎さるく」をご紹介いたします。「長崎さるく」は、こちらに概要がございまして、一般社団法人長崎国際観光コンベンション協会が主催しておりまして、資料の表中、4段目に概要がございまして、特製マップを片手に各自が自由に歩く「遊さるく」ですとか、長崎名物・ガイド付きまち歩きツアー「通さるく」などがございまして、こういった企画から構成されてきて、そのうち、マップをもとに歩く「遊さるく」は全45コース設定されておりまして、戦災関連としては4コースが設定されています。14ページの方へいきますが、「遊さるく」の概要としましてはこういったことになっておりまして、例えば自分たちでマップを片手に歩くわけですが、そのマップはJR長崎駅構内の総合観光案内所などで無料で入手できる、そのほか、インターネットでもダウンロード可能といったことで、非常に入手しやすいものとなっています。15ページですね。戦災関連のコースのうちの一つ「平和コース」でございまして、コースとしては1.2km位、それほど長いものではございませんが、ゆっくり立ち止まりながら歩くということが基本になってございます。

最後に、事例4ですが、前回もそうですが、人が重要であるというご意見をいただいておりますので、人に焦点を当ててみるということで、この委員会でも名前が何度か出ていたのですが「まいまい京都」をご紹介いたします。こちら16ページに概要がございまして、この「まいまい京都」の特徴としまして、「誰もが知る観光資源ではなく、見過ごしがちだった京都の町の魅力を伝える、まちあるきミニツアー」という部分もありますが、これもさることながら、京都の住民であって、資料にも「名物ガイドさん」として紹介されていますが、バラエティに富んだガイドさんたち自身が、ツアーの魅力になっていると、これは非常に特徴的かなと考えてございます。結果としまして、ツアー参加者一人当たりの平均参加回数は約3回となっていて、リピーターが多いと。特に、特徴として外部から来た方もなんですけど、京都市民も結構リピーターとなっていると聞いてございます。このあたり「人に会う」「人とつながる」という面で、非常に参考になるのかなと考えてございます。それから17ページです。もちろん、「誰もが知る観光資源で

はなく」という部分も非常に重要でございまして、大工の棟梁さん、老舗呉服屋の店主さんといった方々、様々な視点からのツアー企画といったものが大きな魅力になっていますので、例えばここに6つ程コース例がありますが右上にあるような、廃線マニアといく、京都市電北野線「N電」の痕跡、といったもの、地域の魅力を狭いのですが、非常に深く掘り起こすような企画も、参考になるのかなと考えております。

ここまで、事例等ご紹介いたしました。本日も議論いただきたい論点としましては、主にこの3つですね。まず東部地域の回遊ルートへ、市民一人ひとり、仙台市民に限りませんが、繰り返し足を運ぶために必要なこと、そのために必要な仕掛けは何か、それから回遊の仕組みの実現のために、沿岸部の利活用拠点に必要な機能は何か、それから3番として現地で得た経験を、沿岸部の利活用拠点でフィードバックするための仕掛けとして考えられることは何かという3点を中心としてご意見をいただければと存じます。説明は以上になります。

○宮原委員長

ありがとうございました。東部地域における回遊性の実現についてということで、事務局からご説明をいただきました。皆さんの方からご質問やご意見ありますでしょうか。前回かなり東部地域のところはこここの資料3の修正版のところになると思いますが、仙台市が丘陵地域から沿岸部まで一つの中で拠点性。中心部と東部、それから丘陵地というところでアーカイブの関係性、それから特に東部はフィールドが遺構も含めてもう少し活用してはどうかという意見があったかと思っておりますので、ここら辺を事務局の方でイメージ化していただきましたので、これについて意見をいただければと思います。間庭委員さんお願いします。

○間庭委員

大変いい資料にまとめていただきまして。資料4の横長のものの左側から出発前、現地、到着後があって、さらに下にそれが続くというようになっております。非常にいいなと思います。

資料1の右上の基本理念の作成にあたってと関係するのですが、2つ目のところで人をつなぐ部分というのが書いてあるのですが、資料4の方に置き換えてみると、そういうことが反映されている部分があるなと思う一方、先ほど本江さんが仰っていたのですが、震災というのは過去に起きた大変貴重な事実であると同時に、現在進行形で将来に続くという可能性が大いにある事柄ですから、過去に起きた非常に貴重な事実をしっかりとコンテンツとしてここにあるようなことを目指していくと同時に、やはり、時をつなぐといたしますか、これが過去に起きたことで将来起きえない話ではなくて、という意味で一番下の方にあるように、「自分の地域で考える」とかいろいろと書いてありますが、そういう風な事に活かせるようにしていくことが大きな機能だと思いますので、そういった意味で人を繋ぐというやや水平的な要素ですが、時間軸で垂直的な要素も加えて、下にある青のところをもっと充実していけるようにしていくことこそが、過去のものを過去に留めないで、現在、及び明日につながっている事実だとして活かしていくということにつながる、ダイナミックなものになりうる可能性があると思います。

そういった意味で、是非、過去のものもしっかり表現するところに二度とこういうことを、災害は起きたとしても減災・防災、あるいは人のつながりという意味での願いの

こもったような表現を是非加えていただければ、非常に充実するのではないかなと思いました。以上です。

○宮原委員長

ありがとうございました。ご意見をいただきましてありがとうございます。他にいかがでしょうか。本江委員さんお願いします。

○本江委員

先ほど申し上げたことの繰り返しになるのですが、資料4は大変に具体的で、特に真ん中の緑色のところに8つ、「緑」「人」と書いてあるだけではピンとこなかったのですが、具体的に「このような経験ができる」ということが示されていて大変いい資料になったと思っています。

やはりご懸念の通り、到着後もう一回見る。言葉としては分かりますが、まあ実際はそんなに見ない。2回も3回も来るってなんだろうなということを考えますと、先ほどの繰り返しになりますが、展示物なり、表示され提示されるものの中に、アップデートされていくことがメカニズムとして組み込まれているものがちゃんとあると。3.11の時はこうでした。その後こんなことがありましたという事実は、そう変わらないわけで、それをちゃんと展示することは必要ですが、その後、色んな事が起こる。先ほど申し上げたことで言えば、その後起こった新しい災害のことがあって、それとどれ位の違いがあって今があるかということについての展示があるとか、あるいは、災害についての理解は、東北大学の災害研ですずっと研究していますから、新しい災害についての深まった理解や、科学的な知見についての展示がアップデートされていく仕組みがあるだろうなど。あとは、文学やデザインでも色々なアイデアが出されているので、そうした新しい動向についてもちゃんと示していくというのがあれば、前とは違うものができるでしょうし、災害についての知識もあるセンターになっていて、かつそれを非常にシビアな災害の現場でみるということに意味があると思います。まとめると、アップデートする仕組みを持っているものを、きちんと展示するようにするということになると思います。

あとは、ベタなことですが、真中の地図を見て改めて色々を見て回って下さいと言うには、やっぱり広いなと思います。左にチラッとレンタサイクルと書いてありますが、これだけではなかなか大変ですので、バスなり、あるいは元気な方であれば、ジョギングであるとか、ノルディック・ウォークとか、楽しみ方というところとちょっと違うかもしれないけど、歩き回ることに楽しさがあるような仕組みを入れて、季節ごとに違っているような、そういうのと重ね合せていく仕組みというのを思いました。

○宮原委員長

ありがとうございました。他にいかがでしょうか。高橋委員さんいかがですか。

○高橋(悦)委員

これまでの委員会の意見を見えるようにしていただきありがとうございます。

資料を基に役割についてしっかり考えていきたいと思っています。

前回の委員会でアクセスについての提案が出されましたが、沿岸部の津波を受けた被災地が陸の孤島にならないように、地下鉄・荒井駅を中心に考えていくことは大事なことです。そして、かさ上げの対象になっている県道10号線は、沿岸部の景観を大

きく変えていこうと思ひます。広域にわたる被災地です。震災のすべてを語り、伝えていくことは難しく思ひます。震災後、追われるように土地を離れて暮らしていた住人が元いた場所に戻りはじめています。これまでの生業に目を向けて再び踏ん張ろうとする人たちがいます。その方たちの暮らし・生業の姿をこれからの復興の姿として位置づけて考えていきたいと思ひます。これからの未来をつくっていくために別枠で考えてはいけな方々であり大切な暮らしの場です。復興地を仙台の財産ととらえ、再生していく地域を丸ごと繋げていけることを考えています。仙台平野での生業を取り戻そうとする方々と連携して、被災地を巡るプログラムの中に農体験や地元歴史・食文化を伝えていくことを組み入れていくことも良いと思ひます。

今も被災の傷跡は癒えてはいませんが、再び息を吹き返そうとする仙台人の生きる力は、この場所に住み続けようとする意義と役割が見えてくると思ひます。

いま、居久根の再生に関わっていますが、震災前にあった、居久根の再生を考えている話を聞きつけ地域外の人たちと繋がりはじめています。暮らしとともにあった、いぐね再生を通して、多くの人が出会うキッカケとなると考えます。

そのためにも、地域をつなぎ暮らしを広げるアクセスについて検討していく必要があります。震災前は、目の前に見える隣の地域に行くための公共交通機関はなく不自由な環境にありました。地域を循環できるアクセスの見直しが必要と思われます。

当会が指定管理をしています冒険広場も一部被災はしましたが、幸いなことに奇跡的に免れた部分があります。当日の震災の様子やその後の復旧・復興の様子を後世に伝えて行くことの大切さを感じています。復興には長い年月がかかることは覚悟の上で諦めずに進むことが大事と思ひています。

○宮原委員長

ありがとうございます。ここを訪れる人たちだけではなくて、ここで生きていく人たち、そういう人たちとどう関わっていくかということも、ものすごく重要だということで貴重なご意見をいただいたと思ひます。他にいかがでしょうか。阿部委員さんお願いします。

○阿部委員

一つアイデアを提案したいのですが、全くの思い付きなので善し悪しが分らないまま提案しますからご検討いただければなという程度です。

水色の部分ですが、これもどこかで見せるということも一つあるのではないかなと思ひます。一番右側は出発前と同じものを見てどう変容したかということですよ。これとは別に戻ってみてから、例えば他者に伝えて、東部地域での体験ツアーというのでしょうか、体験したことを戻った地域で他者に伝えてみてどうだったかとか、もう少し言うと、次のところにある取組みとして活かすことにつながったとか、そういうことをどこかで魅せる仕掛けもありかなという様に。ただ、恐らくここは展開の可能性は多用だろうと思ひるので、あまり見せてしまうと誘導するということになりかねないという、ちょっと不安はあるのですが、見せるのもあるのではないかなと。「こんなふうにかしました」とか、「こんなふうにかしました」ということを同じコーナーではない形で、同じコーナーではないというのは、出発前に見たものをツアーを体験したならばどの様に見方が変わったかということとは、別の次元のお話だと思ひますよ。それも見せる試み

というのはあってもいいだろうと、思っている程度です。

○宮原委員長

ありがとうございました。今現場の方と一緒に色々な方と歩いていらっしゃる佐藤委員さんからも今事務局が示されたアイデアについて意見をお願いします。

○佐藤委員

ありがとうございます。七夕期間中、福岡から仙台へ十数名お越しいただいて、蒲生地区、荒浜地区、閑上をご覧いただいたのですが。

昨年の仙台震災メモリアルプロジェクトで、大学生と一緒に同じ地域を回ってみたところがあるのですが、昨年やってみて一つ忘れていた、自分で抜けていたなというのが一つあって、それは私自身が蒲生だとか荒浜、閑上というのはもともと震災前にも見た行った所なんですよ。なので、まちのもともとの様子というのをちょっとは知っている。また、かなり通っていた蒲生地区があるので、ただそこを全く知らない人に説明する時に自分の先入観が先に入ってしまったなと思う。というのが、県外の方からすれば何処を見たとしても沿岸部は全て表情がのっぺらぼうになっていて、更地化されていて、どこも同じだという様に。ですから、もともとその町がどういうまちだったのか、何を生産していたのか、どういうまちの役割を持っていたのかというのが、やっぱり情報として知らないままに見てしまっていることで、ここが荒浜だ、ここが藤塚だ、と言われても全部同じというふうになってしまうということがあって。

今回やってみたのが、A3の資料4の中の下に「人とつながる、地域とつながる」という項目が挙げられていますが、地域の人とつなげるということなのですね。それはある仮設住宅の集会所で自治会の会長さんの体験談を聞いてもらうとか、または仙台沿岸部にはまだないのですが、「閑上の記憶」というところで映像や体験談、語り部さんから話を聞いてもらう。または地域のものを召し上がっていただく。今回荒浜小学校を震災復興室さんの方に開けていただきました。屋上から全体を見ていただいた。そうやって、のっぺらぼうに見えるものに、こういうまちなんだということをどうやってちゃんと見ていただけるか。そういったことを震災前の写真であったり、または現地の人々の語り言葉であったり、そういったものでまちの実像を見てもらう。バーチャルかもしれないのですが、そういうことで、のっぺらぼうでなくなるまちの顔というのが見えてくるのではないのかなと思いました。

○宮原委員長

ありがとうございました。他にいかがでしょうか。西大立目委員さんお願いします。

○西大立目委員

今、佐藤さんがおっしゃった通りだと思っています。

やはり、外から来た人に対しては何かを伝えるという施設なので、本当にそれはいわゆる従来の博物館とかそういうことと似ていて、常設の展示のほかにどのように優れたキュレーターの人が入っていて、そこでいつも新しいものが企画されているという動きを作り出さないことには、リピーターはなかなか来ないのではないのかなと思います。

あとは、外からの人だけではなくて、私はやはり旅で仙台に来て、ここを見て帰るとい人に対してもそうですし、仙台市民の人に対してもそうですけど、ここに暮らしていらっしゃる方、災害危険区域になって離れざるを得なかった方、あるいは戻ると決

めて戻ってきた方を含めて、もともとの七郷、六郷に暮らしていた方たちがこの拠点にやっぱり足が向くというものがあつたら、どういふ内容であれば被災した人達が自らここに来てくれるのかなと考えるのがとても大事なかなと思います。

じっくりと話し合わないにしても、ここに来てそういう人達と一言、二言、言葉を交わすということは、生々しい何か受け止めて帰ることにつながるのではないかなと思っています。

昨年佐藤さんのお手伝いで仮設住宅を回りまして、被災した人からお話を聞いて、「ふたつの郷」というものにまとめる仕事をやっていたのですが、最初にお話を聞く前に歴史民俗資料館が被災前に撮っていた荒浜の漁業のビデオなんかを見て、上空から荒浜の集落をターンして入って行って漁が始まるのを見て、皆さんすごく声上がるのですね。

「何とかさんだ」「何とかさんだ」と具体的な名前が挙がって。すごく気持ちが揺れるというか、懐かしい気持ちと色んな想いがあると思いますが。何かそういうものを、ここにストックしていくというか、被災する前の暮らしがここに行くとなんか分かるような、そういう機能が一つは必要なんじゃないかなと思います。

○宮原委員長

ありがとうございます。新たな他の視点というか、ここで、前々からいらっしゃった方たちの足が向くような、昔の生活の記憶が何かここで辿れるようなということで、高橋委員さんからもご指摘がありました。そういう視点もつなげていくことが重要だと思います。大滝委員さんいかがでしょうか。東部地区という観点から、今事務局の方でトライしてもらっていますが、何か視点的に付け加えた方がいいこととかありますでしょうか。

○大滝委員

すみません。皆さん方がおっしゃっている事以上のことは言えないので、申し訳ありません。

○宮原委員長

ありがとうございました。阿部委員さんお願いします。

○阿部委員

これも全く思いつきでその程度ものとしてご検討いただきたいと思います。

事務局では既に含みに入っているかと思うのですが、先ほどの修正版資料ですか、全体概念図が配置されたもので宅地、丘陵のところを加えたという。あの図でいうアーカイブ拠点内で行われるイベント的なものと、この東部地域の現地視察をジョイントさせる、コラボレーションさせる試みも積極的に考えられてもいいのではないかなと思うのですね。例えば、私は全くこの辺は分からないのですが、なぜこの辺に黒松の林が、いつごろから植林されたのかという歴史についての講演みたいなことを、じゃあついでに行ってみましょうとか、あるいはこの辺の生態系が大震災の前と後とでどの様に変わって、あるいは生態系が改善されてもっと良くなったとか、そういう講演会と、あるいは語り部さんがここに行かなくても、逆にどこか公会堂とかで「語り部さんのお話を聞く機会があるので後で行ってみましょう」とか、あるいは、今ちょっと目があって思い出したのですが、西大立目委員が「この辺の生活風俗が元に戻らないんだ」というお話をされたことがあつたと思います。そういうものを聞く機会と、「それでは現地へ行ってみ

ましょう」とかそういうことを組み合わせるといふ試みも、効果は限定的かなとは思いつつ、考えられてもいいかなと思いました。

○宮原委員長

ありがとうございました。本江委員さんお願いします。

○本江委員

思いついたことを言ってもいいということですが。

今までの感じを聞いていて、なかなか難しいと思ったのは、例えば「お店をつくるんだけど、お客さんは来てくれるかしら」という構えとなっていることに限界があるように思いました。どうせ一定の投資をするのであれば、一つの思いつきは無理矢理来てもらう。招待をして、例えば災害リスクの高い都市の行政担当の方であるとか、あるいはその子どもであるとか、もっと国際的にインドネシアとか津波のリスクが高い地域の方を招く、インターンシッププログラムみたいなものを作ってはどうでしょうか。全体の予算からすれば実現不可能ではないと思いますので、こういう言い方はあれですが、呼び水になるような方に来ていただいて、仙台を沢山学んで帰っていただく。最初の呼び水に当たる人達を招くのもあるのかなと思いました。

○宮原委員長

実はそういうニーズってあると思うのですよね。例えば、私も体験したことで、宮崎県の方たちが被災した場所を見て、自分たちが参考にしたいとは思っていらっしゃるのですが、ツテとか、どなたにつなげたらいいかということと、どういう場所がというのはほとんど分からないんですね。実は、宮崎の市内でも津波の危険性のことに対して、町内会の皆さんたちにもきちんと伝えたりとか、活動の中に入れていたのだけど、宮崎と宮城は遠いのですよね。費用的なことでもかなり本物の場所に立ちたいけど難しいという。そういうところで何か一つ事業として、本当に情報とか、この場に立ちたいと思っいらっしゃる方たちに、そういったことを提供できるような事業というか。お金もかなりかかると思うのですが、それがまた地元と町内会活動で住民活動に活かしていただけるような形になるのであれば、本当にここの意味というのは大きいものになるかなと。私も本江委員さんのご意見にとっても賛成です。

高橋委員お願いします。

○高橋（悦）委員

震災後、仮設住宅を周りながら、東京（世田谷区）の太子堂小学校中心にしたPTAや、まちづくりの方々と一緒に2年間かけて、東六郷地域の三世代遊び場マップをつくりました。貞山堀で遊んだことや海岸線にある松林で松葉を集めたりして、子どもが生活の担い手だったと話してくれました。三世代マップを2年かけて作成したので今年は、マップを地元を広げようとしています。六郷小学校、東六郷小学校・中学校の子ども達に配布して家族同士で地域を語り伝える、故郷がどんなところだったのか時間を巻き戻すために使いたいと考えています。

また、蒲生地域で生き物調査をしていると聞いていますが、冒険広場の周りでも生き物調査を行っています。震災前に親子プログラムで松林・貞山堀・農地等を探検していました。その時の記録を基に震災後の生き物調査をしてきました。季節ごとに歩いた調査から、空・土・水等の生き物が戻ってきている様子を感じています。震災前には見る

ことのなかった生き物も見つかっています。今後の復旧・復興工事を行っていくと再び沿岸部の環境が壊れていくことでしょう。これからの復興の様子に目を配りながらいきたいと思います。

○宮原委員長

それでは増田副委員長の方から。

○増田副委員長

今、高橋さんからお話がありました。先ほど佐藤さんからもお話があり、今日の資料の議題(1)の方の資料2のところに、MMIX Lab も含めて震災の後どんな活動があったのかリストが載っています。それぞれの関係している専門の分野で、こういうものを皆さんご存知だと思うのですが、分野が違うとなかなか見えてこないものがある。そろそろ活動が終わって、このままでいくと資料が消えていってしまうような震災直後の活動も多分沢山あったと思うので、出来ればこの時期にこの東部を中心に、もちろん西の宅地開発の方でもいいのですが、どこで、どんな活動を、誰がやっていたのか、というのを後の展示の可能性も含めてなんです。少しその掘り起しをやるような活動を、まだ3年目、4年目ぐらいなら出来ると思います。今高橋さんが言われたような生物調査の報告書はここにあるというようなアーカイブスのメタデータを早急に作る必要があるのではないのかなと思います。

そのために、点線のアーカイブ機能と書かれているところに、博物館とか仙台市役所とか歴史民俗資料館とか幾つかの組織があがっています。そこで、基本的にそれぞれの組織は、どの年代の、どういうものを分担するのかを決めるか、もしくは今回の震災アーカイブスの仙台における拠点はどこで、それはどこが、何を、どう予算を使ってやるのか、というようなことをなるべく早く決めた方がいいのではないかなと思います。例えば、戦災復興記念館という資料館があるわけですが、あそこに何が所蔵されて書庫に何があるのか、仙台市博物館が市史編さん室を作って、大量の文章を集めて本にはなっているけど、それ以外に何があるのかというのは、実は一生懸命調べに行けば分かるのだと思うのですが、なかなか見えていません。例えば、六郷、七郷など、昔の市町村合併の前からこの地域がどうだったのかとか、それぞれの農業のやり方というのはどういうふうに進んできたのかというのは、論文等も含めて、是非展示の基礎になる資料収集の活動を、そろそろ始められるのがいいのではないかなと思います。それで、可能なものについては、ネット上等でのアーカイブスにアクセスできるような形で公開していくというのが重要ではないかなと思います。

次に、回遊性についてはこのところに避難施設がつくられ、避難道路の計画があり、東西道路をどういうふうに進めるのか、避難路をどう整備するのかという議論が一方で動いているので、津波避難施設だったり、サイクリングロードとか、カヌー係留所とかの施設整備も個別にプロジェクトとして動いていくだけではなくて、東部地域のメモリアル全体の回遊性の中にどう位置づけられるかということをやりながら、少しずつ機能を活かしていくようなことを考えていければいいのではないかなと思います。伊達政宗公の400年前からここに何があったのか知りたいというのが、多分一番大きなここを訪れる理由になるので、もっと長い歴史が存在しているんだろうと思います。

○宮原委員長

ありがとうございました。色々ご意見をいただきましてありがとうございます。そろそろ時間になりつつありますので、あとはよろしいでしょうか。それでは、こちらの方の議論を閉めたいと思います。

それから次に「その他」ということなのですが、事務局のほうから何かございますか。

○事務局（横野室長）

2点ほどございます。参考資料としてこちらの冊子を置かせていただいております。委員会の報告書の骨格みたいなもので、参考にお付けしております。今日、これをご議論いただくというわけではなく、参考にご覧いただきたいという趣旨で付けております。中を開いていただきますと、一枚めくると目次がございまして、もう一枚めくると序文とか、経緯を書く欄があって、中身はブランクの状態でございます。もう一枚めくりますと、前回ご意見いただいた基本理念みたいな形をこちらの左のページに載せていき、また、メモリアルの5つの取組みということで書いてございますが、それぞれの取組みについて概要であるとか位置づけなんかを書いていく。もう一枚めくっていきますと、将来像、今日の資料にもあったものを入れ込んでいく形で考えてございます。その他、後ろにいきますと5つの取組みごとの具体的な委員会としてのご意見なんかを参考にまとめさせていただこうというような骨格でございます。今日の段階ではこれをご覧いただきたいということでございまして、今後、次回第9回の委員会のおきましては、ご議論に耐えられる、ある程度まとまったものをお示しできればなと思ってございます。そのため、11月に想定しております次回の委員会の間に各委員さんとの間で個別に文脈等々を調整をさせていただくようにさせていただければなと思っております。個別の意見調整の進め方につきましては、また、委員長とも後程ご相談させていただきまして、進めてまいりたいと思っております。

もう1点は冒頭でもご説明させていただきました。もう一枚「3月12日はじまりのごはん」につきまして、これは佐藤委員さんからご紹介いただければなと思ってございます。

○佐藤委員

それでは簡単に。最初に、ここに今、お手元にお配りさせていただいたチラシは、まだ最終決ではないので、案だということを最初に言えということだったので申し上げます。「3月12日はじまりのごはん」というのは、仙台のメディアテークの3がつ11にちをわすれないためにセンターさんと協働事業ということで、初めて今回やらせていただくのですが、今までは、震災の写真を提供していただいた方をゲストに招きながら、ご自分の写真の解説をしていただく、何故撮ったのか、どういう生活をしていたのか、ということをお話をさせていただく公開サロンだとか、あとは「携帯で撮った3.11はありますか」という呼びかけで、携帯の中に恐らく入っている写真を募集をする。これは今まで、震災の写真の募集は3回、公開サロンは13回、今までやってきたのですが、今回の新しい企画というのは、震災後初めて食べたものについて話をしてもらおうと思っております。今までご提供いただいた写真の中から、食べ物に関する写真を40数点セレクトしまして、例えば保存食だとか、送ってもらった支援食であったり、初めて食べた炊き出しであったり、ランタンを灯して食事をしている家族の様子であったり、そういった食に関するものを10カテゴリーに分けてそれを4、5枚ずつ合計40数点選んだので

すが、それについて展示したものに来場者がそれぞれ自分の体験談を付箋に書いていく、写真に貼り付けてもらう、そんなイベントです。これは単に食べ物というものだけの話では、実はなくて、公開サロンの中でかつて何度か聞いたことがあったのですが、震災後に初めて食べたのは何ですかと聞いた時に出てくる答えは、食べ物から触発されて、当時の自分の生活ぶりも炙り出されて語り始めるということがあるんですね。例えばおかしな話だと、「水が無かったのでウーロン茶それでお湯を沸かしてカップラーメンを食べた」なんていうものだったり、「マーガリンだけ1週間舐め続けました」なんてこともあるのですが、そこは保存食が有ったのか無いのかとか。または、阿部先生から前に震災ユートピアの話があったと思いますが、その時に隣近所とのやりとりはどうだったのかとか、町内会の炊き出しの準備はすぐに出来たのかとか、そういう震災後の市民生活というのは食べ物を通して浮き彫りにされるというのがあって、これを1ヵ月半というロングランでどれだけの市民生活というのが浮き彫りにされるか、または体験談が書かれるかというのを試してみたいということで、仙台メディアテークさんと一緒に開催することになりました。

A3の資料1の中心部についての拠点について書かれていることがあると思うのですが、中長期的にはセンターとなる拠点が必要だということに、「収集・編集・発信は沿岸部では出来にくいので中心部にも必要」、「語る場が必要である」ということが書かれていると思うのですが、私たちのこのイベントも展示をして語ってもらって、そして語ったものを記録として残す、編集をするという、中心部の拠点としてあるべき姿というか、そういったものを今回はプレゼンをさせていただきたいなと思っています。ここには「中長期的には」と書いてあるのですが、語らなくなるとそれこそ風化すると思うので、のんきに中長期的と言っている場合ではないのではないかなと思っていますので、それこそ何処か新しくつくらなくたって出来ると思います。既存の施設でちょっとしたスペースがあればこういったことは出来ますので、市民の語る場をつなぎ止めたいというか、絶やさないでいきたいなと、そんな意味でのプレゼンを今回は1ヵ月半をかけてやりたいなと思っています。是非会場に足を運んでください。よろしくお願いいたします。

○宮原委員長

ありがとうございました。議事としましては以上ですが、事務局の方で他に何かございますか。

○事務局（横野室長）

次回の日程についてご連絡ですが、次回11月を予定してございます。第10回につきましては12月を想定してございます。いずれも別途できるだけ早めに日程調整をさせていただきます。多分9回と10回あわせて日程調整をさせていただく形になると思っています。いずれ別途調整させていただきますのでよろしくお願いいたしますと思います。事務局からは以上です

○宮原委員長

その他委員の皆様の方から何かございますでしょうか。よろしいですか。ありがとうございます。

最後に奥山市長より、本日の皆さんの議論を踏まえましてご発言をいただきたいと思っております。

○奥山市長

毎回のことでありますが、お忙しい中、ご議論を深めていただきましてありがとうございました。

今回、お聞きをされていて改めて私からも感謝申し上げたいと思いますのは、私どもが当初復興計画の中にメモリアルに関連してということで4つの事項を挙げさせていただきましたが、我々自身もさすがに非常に慌しい中で、ある意味ではあまり先のことを考えないで「まあこういうものがあるかな」位のところで立ち上げたテーマでございますので、今回色々と委員会としてご議論を深めていく中で、この4つではないだろうと、さらに他の部分でしっかりと押さえておかなければいけないものがあるだろうというご指摘をいただきますことは、我々として委員会を立ち上げた、まさに甲斐があったというべきことでありまして、改めて感謝を申し上げる次第でございます。

また、中心部と東部、二つの拠点のあり方につきましても、地域としては東部地域がまさにこれからもう一度生活の場になっていく中で、そこに暮らしている人自身が参画するということも含めて、どういう回遊性なり、どういう連結の結節点となることが市民に対して、住民に対して、また住民以外の国内からの方、また海外からの方等に対してというような、重層的な視点でご指摘をいただいているということもありがたく思っております。

そして、何よりも、先ほど本江委員のお話では、次に来たるべき戦争のための空白の部屋ということでございますが、要は行政というのはなかなか空白部屋について考えることは苦手ではありますが、苦手なことをまさに考えないとこのメモリアルという仕事は成就しないどころか、スタートすることも出来ないだということをご指摘いただいたように思いますので、そのことをしっかりと我々も肝に銘じながら、これからいよいよ最終的な部分に入ってまいりますので、事務局とともに私も努めてまいりたいと思いますし、なお、委員の皆様にもご足労をおかけしますが、残余の回もよろしくお願ひしたいと存じます。誠にありがとうございました。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは本日の議題は以上で終了いたします。もし皆さんの方から付け加えたい点がございましたら、事務局の方にご連絡を別途お願いしたいと思います。

事務局の方は連絡事項ございますか。

○事務局

特にありません。

○宮原委員長

それでは、以上をもちまして本日の委員会を終了します。長い時間どうもありがとうございました。

以上、議事録の内容につきまして、すべて相違ありません。

平成26年 9月22日

議事録署名者

(委員長) 宮原育子 _____

(委員) 高橋悦子 _____

